

『意味学上からみた国際コミュニケーション』

東京秋工会 幹事
山形 俊男
(昭和39年機械科卒)



1. 意味学は七十才

意味学は70年の歴史があり、言葉やその他を印(しるし)の記号として考える学問の事です。その人が何を言おうとしているかと言う事と、受け取る側(聞く側)がそれをどう言う風に解釈するかという二つの面を研究する事が意味学にとって重要です。

意味学における基本的な命題の一つに、記号と、記号を表すものとをはっきり区別して考えなければいけない。それが実は簡単なようで非常に難しい。例えばリンゴが複数ある。それを全部リンゴと呼んでいる。複数の果実は別々の実体を持っている。我々はそれらを一括(ひとくく)りの言葉で表します。そこに色々な、いわゆる意味学的な問題が生じる可能性があるのです。

2. 名前と物との区別

シカゴの意味学研究所に、ある人が訪ねて来て「私窓が怖い。窓の傍に寄ると体が震える」「どの窓でもそうですか?」「どの窓も同じ現象です。先生治りますか?」と訊きます。

精神分析したら、子供の時にアパートの二階でイタズラした事が有った。その子を面倒見ていた保母が、「イタズラ」を止めさせる為に、子供の足を持って窓から逆さにぶら下げて「今度いたずらしたら手を離すわよ」と脅かしたそうです。

これは三、四才の子供にとって物凄いショックだった。精神に傷が付いて、それで大人になっても窓の傍が怖くて近寄れない事が精神分析で分かった。先生は「この部屋の窓はあなたの窓とは違う。世の中には窓が沢山あるが皆な違う」と説明した。やがてその人は治癒されたそうです。こういう反応を意味学的反応と言います。

このように具体的なものを指す記号は、それ程大きな混乱を起こしませんが、抽象的な、概念を表す記号は非常に複雑な、いわゆる意味学的な反応が起きて大きな混乱を呼ぶ場合が往々にしてあります。

3. 気づかれない誤解

一般の日本人は、海外の情報を日本語の媒体で読み、あるいは聞きます。特派員、情報機関、マスコミの担当者は、日本語以外の言語で来る情報を日本語に直して日本人に解かる様に提供しています。そこに非常に大きな混乱や誤解の起きる可能性が有るのです。

例えば1853年(安政2年)に米国海軍の提督ペリーが黒船を率いて浦賀に来てから、日本は翌年鎖国を解いて世界に港を開港した。開港した年に神奈川条約が出来た。その条約により日本政府は米

国政府に、下田と函館の港を開いて日米間の国交が始まったのです。国交が開始した翌年の夏、下田沖に米国軍艦が現れ、軍艦から米国の初代総領事タウンゼントハリスが降りて来た。彼は下田奉行所に行き「私は米国総領事として下田に赴任して来た」と伝えた。下田の奉行所はそれを聞き仰天した。米国総領事が着任する事は聞いてなかったからです。慌てて江戸幕府に問い合わせたが、幕府の方でも総領事は着任する筈は無いと言う。

非常に揉めました、その理由が面白い。日本は長い間鎖国で唯一開港していたのが長崎港でオランダと交易していた。外国人との会話はオランダ語が主であった。

黒船が来た時に日本の通事(今で言う通訳)が軍艦に行き、おぼつかない英語でI speak Dutch.(私はオランダ語を話せる)と告げた。

黒船の中ではオランダ語を話せる人を通訳に立て、両国の会話が始まった。先ず艦長が英語で話す。それを通訳がオランダ語に直す。日本の通事は幕府の役人にオランダ語を日本語に翻訳して聞かせる、と言う形で交渉した。そう言う経緯があって、神奈川条約はオランダ語と言う言葉を通じて締結されたのです。

ですから、最初の正文がオランダ語だった。オランダ語を片や英語に、片や日本語に直して、日本は日本語の条約文を持ち、米国は英語の条約文を持っていた。そう言う状態の中で、米国はハリスを総領事として日本に派遣して来た。日本の方では知らない事が起こったのです。

どこで誤解が起こったかと言うと、面白い誤解です。英語の正文によると条項の一つに、「日本と米国のどちらかの政府が必要と認めれば、米国は領事を下田に置くことができる」と書いてあった。日本の正文には、「日本と米国の両国の政府が必要と認めれば、米国は領事を下田に置ける」と書いてあった。

これでは誤解の起こるのは当然です。そこでオランダ語の原文を確かめて見ると、何と日本側に間違いがあり、米国の立場が正しいと言う事になって、米国の総領事はそのまま下田に居座ったのです。

これが日本の外交関係における最初の意味学的ツマズキでした。

4. ポツダム宣言の黙殺

第二次世界大戦が終わる前に、連合国の指導者達が昭和20年7月末ポツダムに集まって、日本に無条件降伏を迫るポツダム宣言を発表した。

このポツダム宣言の少し前に、米国はニューメキシコ州の原爆実験地で秘密裡に行われた原子爆弾の実験に成功していた。米国大統領、スターリン、チャーチル、蒋介石の四人が集まった時に、米国は強力な兵器が完成したので、日本に無条件降伏を迫ろうではないかとポツダム宣言が作られたのでした。

内容は「無条件に降伏しなければ日本は完全に破壊されるであろう」と言う意味のものだった。大事な事は「日本は完全に破壊されるであろう」と言っている事です。これは「無条件降伏しなければ原爆をどんどん落とすぞ」と言う意味です。

このポツダム宣言が日本語になって日本に伝えられた。直後に閣議が行われ、当時の総理大臣鈴木貫太郎大将が閣議後の記者会見で、「ポツダム宣言をどうされるのか、日本はどうするつもりか」と記者から質問された。

その時総理は「あんなものは黙殺する」と答えた。それを当時の

同盟通信社(今の共同通信の前身)が、ポツダム宣言後の日本総理の言明は「日本はその宣言を黙殺する」と言った事を、英文で海外版ニュースとして世界に配信した。

「黙殺」は相手にしないとと言う意味に受け取られて、これが連合国に伝わった。連合国の方では「ああ、我々は日本政府に無条件降伏を迫っているのにそれを無視するのか。それなら止むを得ない原爆を使おう」と言う事になって、広島と長崎に原爆が落とされて、何十万の人々が死んだのです。もし本当であれば、誠にこれは言葉の解釈による歴史上最大の悲劇では無いかと思います。非常に興味深い意味学的な問題だと思います。

5. 「前向きに検討」

日本語の表現の中には独特のものが多く、しかも意味がはっきりしないものが多い。ある一つの日本語にぴったりと対応する表現が、英語に無い場合が有って翻訳するのが難しい。その為に誤訳が起こる事が非常に多いのです。

目立った例として日本語でよく「それは前向きに検討しましょう」と言うのが有ります。

数年前に東京外国人特派員クラブで、当時の外務大臣を招き昼食会が行われた。外務大臣は日本語で演説して、それを専門の通訳の方が翻訳した。演説の後に質疑応答になった。ある質問に対して外務大臣が「それは前向きに検討しましょう」と返事した。通訳の人が「前向き」にと言う言葉を in a forward-looking manner と訳した。問題は、forward-looking manner という言葉は誤解だと言う事です。

「前向きに」と言うのは、ある事柄に対して積極的に何かやろうと意欲を示す言葉です。

forward-looking manner と言うのは、「先の事を考えて」とか、「目先のきく形で」と言う意味です。誰かが「前向きに」と言うのを in a forward-looking manner とする風に誤解して使われてしまった。ここはPositively(積極的に)の単語を使うべきかと思えます。

6. 「善処しましょう」

同じ様な例で、佐藤総理が沖縄返還の事で米国へ行ってニクソン大統領と会って色々話をした。その中で日本から繊維が安く入って困る「何とかしてくれ」と言われた。佐藤首相は、勿論日本語で喋ってそれを通訳したが、「それは善処しましょう」と答えた。これも良く使われますが非常に漠然とした言葉です。

「semantics(意味学)」は、この様に非常に実用的な価値のある学問です。大事な事は、意味学的な考察を行って議論する前に、「あなたは今、こう言う言葉を使ったけれども、それはどう言う意味で使っているんですか」と確かめる。その上で「私も同じ意味で使いますよ」と言う事であれば話し合いは成立して有意義な議論になります。

7. 政治学と意味学

この意味学的な効果を逆に利用している場合があります。例えば池田さんが総理になった時に「所得倍増」と言う事を唱えました。「所得倍増」と言うのは一般の人が聞きますと非常に嬉しい言葉です。聞く人の頭の中に意味学的な反応を掘り起こし、その言葉を使って政治家に対する気持ちに影響を与えます。池田総理が政治をやってくれば、我々の月給が間もなく倍に成るんだと言う印象を皆持った。ところがそれは誤解であって、彼の言った「所得倍増」と言うのは「国民所得」を倍にして行こう、それを目標にしようと言う事なんです。政治家はその誤解を解こうとしない。そう言う印象を持って貰った方が都合が良いから、そのままにして置くと言う事が有り得るのです。

使う方も使われる方も、そう言った言葉の意味を上手く理解して行けば、人間の生活や混乱を、最小限に留める事が出来るのではないかと私は思います。

【参考文献】

本文章は1976年 古河国際教養センター国際教養公開講座で行われた 村田聖明(ジャパン・タイムズ常務取締役)の公演記載文から要約して掲載させて頂きました。

フリーランスの企画・デザイン屋として、やり直しすることになりました。いろいろできる……は、何もできないに等しい、と言われたこともあります。いろいろな企画やデザインのテーマに対応できること、私にとっての「売り」はそれしかありません。

いつの間にか過ぎた、デザイン屋としての三十と数年。これまで蓄積させてもらった様々なノウハウと技術をどう活かしていけるのか、これからの大きな課題です。

船木一美 (昭和48年機械科卒)

対応業務

■ 企画・開発

> 商品(製品)企画・開発
各種製品のアイデア・提案及びデザイン・設計・試作・生産準備の業務

> 事業企画 開発

商品事業を主として、各種事業の調査・計画及び実施準備の業務

■ 制作・作成

> 各種印刷物の制作
カタログ、会社案内、パンフレット、ポスター、シール、他

> プレゼンツール作成

企画提案書、事業計画書、プレゼンテーション、レディング、他

■ デザイン

> 工業(製品)デザイン

各種機器・機械部品及び家具、雑貨 等の製品デザイン

> 寄葉(販促系)デザイン

食品カタログ等販促ツール、パッケージ、マニュアル 等の制作デザイン

> 空間(店舗等)デザイン

店舗等内外装のインテリア、ディスプレイ、イベント展示 等のデザイン

> サインデザイン

各種マーク、ロゴ、サイン及びCI、ブランド等の企画・デザイン・制作

■ 特殊業務

> バイジック(体感音響振動)に関連する業務

バイジック技術の活用開発並びにバイジック製品の販売及び取扱い

P&D_KFworks
プランニング&デザイン_ケーエフ_ワークス

〒352-0034 埼玉県新座市野寺5-6-20
TEL/FAX.042-439-3997
携帯.090-3049-7291
E-mail kf-works@sca.plala.or.jp